日蓮遺文『不動愛染感見記』小考

髙森大乗

はじめに

日蓮聖人の初期の真蹟遺文として知られる『不動愛染感見記』[1]は、立教開宗の宣言がなされた建長五年（一二五三）の翌年に著され、日月の中に不動・愛染の二明王を感見するという特異な宗教体験を表明した書として位置づけられる。そして、従来より、日蓮聖人の真言相承の系譜を明らかにする書として注目され、研究されてきた。しかしながら、それらの考察は、本書にしたためられた文章、つまり文字の部分に関して論じられてきたものであって、本書の図絵そのものに着目したものは少なかった[2]。実は本書には、不動明王と愛染明王の図絵の中にも、日蓮聖人の宗教的世界観をめぐる知識と認識がよみとれるのである。本章では、『不動愛染感見記』の図中に示されたそれらの表象の意義を中心に、小考を加えるものである。

一、『不動愛染感見記』の書誌

日蓮真蹟『不動愛染感見記』は、現在、千葉県安房郡保田妙本寺に蔵される。立教開宗の翌年の建長六年（一二五四）六月二五日、日蓮聖人三三歳の執筆で、「日蓮」の署名が認められ、年月日の記年のある真蹟遺文では、現存最古のものである[3]。掛幅二幅で、縦三〇・〇cm、横五九・四cmの二紙からなる[4]。昭和四三年（一九六八）四月二五日に、国の重要文化財に指定されている[5]。

本書は、一枚ずつ紙央に日と月とを表す円を描いて、それぞれ愛染明王と不動明王の図像を描画する。

日輪の中に描かれた愛染明王は、一面八臂で、飛馬に跨る跨像形態。口を開いた三目忿怒形で、条帛を纏い、五鈷鉤を頂く宝冠をかぶり、左手に弓・羂索・三鈷鈴（金剛鈴）と思われる持物を、右手に五鈷杵・箭・開蓮・宝剣と思われる持物をそれぞれ把持する。愛染明王の後光の光背は、日輪を象徴したものか、七つの小さな光輪をその周囲に配し、更に光背の外に一段と大きな光輪がひとつ描かれる。像の左右には水瓶、黒烏、獅子と推測される四足獣、愛染明王と思われる三目忿怒形の明王尊の頭部の図像などが確認できる。なお、愛染明王外周の日輪は三重の同心円状に描かれ、周囲に日蝕時等に見られる光冠（コロナ）と思われる複数の発光現象が鮮明に図示されている。軸装の際に表具の関係で裁断されたためか、日輪の上端は欠けている。

一方、不動明王は一面四臂の忿怒形で、片足で立つ立像形態で描かれる。条帛・天衣を纏い、左手には羂索・開蓮を、右手には宝剣（三鈷剣か）をそれぞれ持す。像の足下には兎が、像の左には樹木と人物坐像が配置され、また上空には飛雲がたなびいている。不動明王像に特有の火焔後背はみえない。不動明王が月中に描かれていることの根拠は、遺文の文面からは読みとれないが、図中に兎などが描かれていること、感見の日付が十五夜に相当することなどをふまえて、同図の円形が満月を表顕するものと見なされてきたものと推察される。

各図像の右側（本紙右端）には、二明王各々の感見の月日と真言の陀羅尼咒を顕わす梵字とが記される。

愛染明王の右側には「生身愛染明王拝見」「正月一日日■之時」（6）の下に真言陀羅尼の「■■■■■■■■」の梵字が記され、梵字の右には「ウムシッチシャクウムハムコク」と振り仮名が付されている[7]。

一方の不動明王の右側には、「生身不動明王拝見」「自十五日至十七日」の文字の下に、真言陀羅尼の「■■■■■■■■■■■■」の梵字が記され、右に「ナマクサマンタホタナムカム」と振り仮名が付されている[8]。

図像の左側（本紙左端）には、真言相承の記述と記年ならびに授与書きがそれぞれ認められる。真言相承の記述と記年ならびに授与書きについては、両紙とも同様の記述がなされており、ともに右から「自大日如来至（于）日蓮廿三代嫡々相承」「建長六年六月廿五日」「日蓮授新仏」と併記される。

二、『不動愛染感見記』の伝来

『不動愛染感見記』の伝来については定かでない部分が多いが、本書の写本や版本、および本書に関する記事を紹介した文献類について管見に及んだ限りの史料を紹介すると、以下の五点になる。

（一）広蔵院日辰（一五〇八～一五七六）『祖師伝』、永禄三年（一五六〇）完成

『不動愛染感見記』全文の書写と、『不動愛染感見記』の図絵に関して、愛染明王が「日形」の中に、不動明王が「月形」の中に描かれている旨の記述がみえる[9]。

本書によると、『不動愛染感見記』真蹟が六老僧の日興（一二四六～一三三三）から本六人の日目（一二六〇～一三三三）に付嘱された旨が記されている[10]。保田妙本寺は、日目の弟子の日郷（一二七二～一三五三）の開創であるところから、本書は代々日興門流日郷門徒に伝えられたものと考えられる。

（二）木版画『不動愛染感見記』、貞享四年（一六八七）版刻

貞享四年（一六八七）に版刻された版画『不動愛染感見記』の版木（墨版）が、今日、保田妙本寺に蔵されている。また、これをもとに印刷した木版刷り二紙が、静岡県田方郡菅引本成寺等に所蔵される[11]。本成寺は、かつて柳瀬実成寺の末寺で、旧本門宗に属しており、当版画が日興門流の一部に流布していた可能性を示唆している。

同版画は、真蹟を忠実に臨写した版下絵をもとに木版を彫刻したものであるが、注目すべきは、今日保田妙本寺に蔵されている『不動愛染感見記』の真蹟のうち愛染明王の日輪図が上端を欠くのに対して、当版画は、日輪を表す全体の円形が整っているという点である。当版画が臨写された当時には、まだ愛染明王の本紙が、軸装のため裁断される以前の完全な姿を遺していたのか、あるいは、木版の画稿を描いた絵師が、想像によって復元したのかは定かではない。

また、本紙下段の余白部分に界線を引いて、「久遠・妙本両寺嫡々相承日月形像奉写者也。貞享四丁卯天、房州妙本寺三七世日達。版興之願主、松田宗林」との版記が認められる。妙本寺の伊東阿闍梨日達（一六四二～一七〇四）は、同寺の二二世[12]の歴代住職で、小泉久遠寺の二三世にも名を連ねている。本書が日興門流のなかでも小

泉久遠寺および保田妙本寺の両寺に代々相承されてきたことを立証する根拠として、この文面は重要である。

こられの事実から、『不動愛染感見記』が、版木の作成された貞享四年（一六八七）には、今日伝存する姿とほぼ同じ状態で存在していたこと、愛染明王の日輪については、上端が欠けていなかった可能性があること、同書が小泉久遠寺および保田妙本寺の両山に代々相承されてきたものであること、同書の図像について「日月形像」との認識がなされていたこと、などが読みとれるのである。

（三）豊臣義俊（生歿年未詳）『法華霊場記』、貞享三年（一六八六）版行

同書の冠部「蓮公行状年譜」二一丁[13]に、不動・愛染の二明王が出現したという日蓮聖人の宗教体験が、伝記年譜の一部として紹介される。当時、すでに『不動愛染感見記』における日蓮聖人の体験談が世間一般に流布していたことを物語っている。

（四）六牙院日潮（一六七四～一七四八）『本化別頭仏祖統紀』、享保一六年（一七三一）脱稿

同書の四巻一二丁[14]に『不動愛染感見記』の図画と梵字咒文を除く全文が書写される。日潮が保田妙本寺を訪れたことが記されるので、日潮自身が直接本書に見えたことがわかる。また、授与書の「新仏」については、六老僧の日昭（一二二一～一三二三）をさすことが紹介される。なお、『不動愛染感見記』の所伝について、「是日月二図乱国展転今在房州之保田妙本寺」とみえ、本書が戦乱等によって展転した末に、保田妙本寺に格護されたことが明かされる。

（五）英園院日英（一七九三～一八五六）『高祖年譜攷異』、弘化四年（一八四七）改刻

同書の上巻三〇～三一丁[15]の建長六年の条に、正月朔日に愛染明王を、十五日から十七日に不動明王を感見したという日蓮聖人の宗教体験が伝記の一部として紹介される。

以上五点のうち、『不動愛染感見記』の図絵に関して言えば、（一）（二）（四）において、不動・愛染の二明王が「日月」の中に描かれている旨の記述がみえるのを除いては、多くが『不動愛染感見記』の文面や内容のみの紹介にとどまり、図絵についての具体的かつ詳細な説明はみられない。

なお、刊本については、明治三七年（一九〇四）刊行の加藤文雅編『日蓮聖人御遺文』（霊艮閣）、昭和九年（一九三四）刊行の浅井要麟編『昭和新修日蓮聖人遺文全集』（平楽寺書店）ともに未収録であったが、昭和二七年（一九五二）に『昭和定本日蓮聖人遺文』（身延山久遠寺）において新加され、本文・図絵ともに初めて公開された。また、今日、真蹟の正確な状況は、『日蓮聖人真蹟集成』（法蔵館）等によって確認が可能である。

三、『不動愛染感見記』の内容

次に、『不動愛染感見記』所記の文言から読みとれる内容について検討する。

先述の通り、本書は、建長六年（一二五四）一月一日に日蝕の太陽の中に生身の愛染明王を感見、同年同月一五日～一七日の間には満月の中に生身の不動明王を感見したという特異な宗教体験を、日蓮聖人自らが図写したものであると伝えられている[16]。

ただし、厳密には、愛染明王感見の際は「日蝕」ではなく「日■」であり、建長六年元

旦に日蝕などの天体の異変があったことは当時の記録には認められない[17]など、いわゆる今日でいうところの日蝕と同じ現象が起こっていたか否かは疑問が残る。また不動明王感見の一月一五日も、遺文中には正しくは「一月」とは明記されておらず、更に不動明王の図が満月であるとも断定できないなどの問題点が指摘できる。これらについては、後述するとして、こうした感見の宗教体験を通じて、日蓮聖人が、大日如来より二三代にわたる血脈相承を受けたという内証を表明されたのが、本書の意義ならびに特色であるといえよう。

日蓮聖人が出家得度した清澄寺[18]は、当時は比叡山山門横川の流れを汲む天台宗寺院であったと伝えられ、虚空蔵菩薩[19]を本尊とする寺であるから、台密の教えの中で育った日蓮聖人が、叡山・南都の修学中に密教の相伝を受けたであろうことは充分に推測される[20]。日蓮聖人は法華経至上主義を生涯貫いたことで知られるが、立教開宗の当初は、まだ真言密教に傾注していたことが理解できるのである。それは、日蓮聖人の初期遺文である正元元年（一二五九）の『守護国家論』[21]に、法華真言斉等を容認するような教義が認められることからも明らかである。また、日蓮聖人には、一二〇幅以上の直筆大曼荼羅が遺されているが、法華経の会座を表顕したはずの大曼荼羅に、実際には来臨していない不動・愛染の二明王（と推測されるもの）が、他の諸尊たちと異なり、秘密めいた種字（梵字）で書かれていることは、建長六年（一二五四）当時の感見が、聖人のその後の思想に強い影響を及ぼしていることを表している。その著書においては晩年に真言批判が激しさを増す一方で、大曼荼羅への不動・愛染の勧請は、ついに最後まで消えることはなかったのである。

なお、『不動愛染感見記』の授与書きに「日蓮授新仏」とみえる「新仏」が何を指すのかは明らかではない。新たに仏弟子となった「新仏子」の意とも解釈できる。その人は、一説に当時の清澄寺の住僧であった肥前公日叶（一二二八～？）とも推測される[22]。しかしながら、日号は、真言僧の間でも多く用いられたことが知られるので、必ずしも日蓮の弟子とは考えにくい。あるいは、叡山修学時代の学友にあたる弁阿闍梨日昭（一二二一～一三二三）をさすものとも推測されているが、確証を得ていない。また先述の如き本書の伝来から、白蓮阿闍梨日興（一二四六～一三三三）とも推察されるが、宗門の所伝では日興は岩本実相寺入蔵を前後して日蓮聖人のもとに入門したとされており、時期的に合致しない。

四、『不動愛染感見記』の図像について

次に、『不動愛染感見記』所顕の図画から読みとれる内容について検討を加える。

まず、仏画としての不動明王と愛染明王について検討を試みる。そもそも、不動明王と愛染明王はともに真言宗の主尊で、降魔・愛敬の本尊として信奉されてきた。

不動明王は、火を怖れず不動であるために命名された明王で、あらゆる障害を焼き尽くす大智の火を身体から発するといわれる。密教では、五大明王の中心的存在で、大日如来の使者となり、悪を断じ、善を修し、真言行者を守護する役割を担っている。その姿は多様に表現されるが、一般に憤怒の形相で、火焔光背を背負い、弁髪を垂れ、三鈷剣・羂索などを持す[23]。

一方の愛染明王は、人間の愛欲の煩悩をそのまま菩提に変える働きをする明王で、不動明王が大智を表すのに対して、愛染明王は大慈を表するともいわれる。三面六臂で獅子冠をかぶり、弓矢・金剛鈴・五鈷杵などを持する。愛欲を表現するために全身を真紅に彩り、後背には紅焔に燃える赤い日輪を背負ったり、また愛染明王の全身が日輪中に描かれることが多い[24]。『不動愛染感見記』において、愛染明王が日輪中に描かれるのは、このことに由来すると考えられる。

『不動愛染感見記』の不動明王が月輪中に、愛染明王が日輪中に描かれていることに関して言えば、建保年間（一二一三～一二一九）成立の『四帖秘決』に「日愛染、月不動申、日輪中愛染王現御座也。能日晴閑久見日輪、即日中彼形像顕現給云云。月極明夜、十五日円満無礙ナルニ、数刻臨天見月輪、其中必不動明王形像現給也。日愛染、月不動云事大集経見承云云」[25]とみえる記述が参考になろう。『四帖秘決』は、天台座主六二・六五・六九・七一世を歴任した慈円（一一五五～一二二五）の口伝とされ、天台座主七九世の慈賢（一一七五～一二四一）の筆と伝えられる。本文中にみえる「大集経」とは、『大方等大集経』のことと思われるが、管見の限りその典拠は未詳である。いずれにせよ、これらの事実は、日蓮聖人以前に既に「日の愛染」「月の不動」という概念が存在したことを意味しており、日蓮聖人がそのことを念頭に置いて『不動愛染感見記』を著したとも考えられるのである。

さて、『不動愛染感見記』には、不動明王・愛染明王の仏画のほかにも、いくつかのモチーフが確認できる。つまり、動物画・人物画・植物画などである。

動物画については、日蝕の太陽の中に烏（ウまたはカラス）が、満月の月の中に兎（ウまたはウサギ）が表現されている。中国・日本では、古来より烏（中国の三足烏、日本の八咫烏）は太陽（日）の象徴、兎は太陰（月）の象徴であったことが知られている。

「三足烏」は、古代中国の伝説上の神禽で、太陽の中にいると信じられていた三本脚の烏のことである。太陽の黒点などから連想されたものと思われるが、足を三本と定める理由などは未詳である。前漢代の劉安（紀元前一七九～紀元前一二二）の『淮南子』巻七「精神訓」[26]や後漢代の王充（二七～九七？）の『論衡』巻一一「説日」[27]などに、日の中に三足烏がいることが記され、この瑞鳥が日精としてとらえられていることが判る[28]。

また、烏の故事は、日本では「八咫烏」がこれにあたる。『日本書紀』巻三「神武即位前紀戊午年六月丁巳条」[29]の神武東征説話などにみえ、神武天皇が東征のとき熊野から大和へ抜ける山中の道案内として天照大神（＝太陽神）のお告げで飛来したという神話の中の烏として登場する。このように、中国でも日本でも、烏は太陽の化身として表現されているのである。

一方、兎の故事は、波羅奈斯国[30]の兎王本生譚遺跡にまつわる伝承としてみえ、この話題は玄奘（六〇〇～六六四）の『大唐西域記』巻七「兎王本生譚」[31]に収められる。兎が月に住んでいるのは、兎の焼身供養に心を打たれた帝釈天が、その亡骸を帝釈天宮のある月に残して後世に伝えることを誓ったという故事によるというのである。これらの説示から判断するとき、『不動愛染感見記』の不動明王の月の中に記された人物画は、帝釈天王をさすものと推察される。

更に、月中に兎がいるとする伝承は、中国では『楚辞』巻三「天問」[32]にみえ、また『論衡』巻一一「説日」[33]には、三足烏の説明とともに、月中に兎や蟾蜍（ヒキガエル）がい

ることが記されるが、その内容は『大唐西域記』とは明らかに異なっている[34]。

因みに、日蓮聖人は『松野殿女房御返事』において「兎は経行の者を供養せしかば、天帝哀みをなして月の中にをかせ給ぬ。今天を仰見るに月の中に兎あり」[35]と説明し、これをもって兎が月に姿を映す理由としているが、これは『大唐西域記』の説示によったものと推察される。

このほかにも『不動愛染感見記』には、愛染明王の乗り物として飛馬が描かれている。愛染明王が馬に跨る姿については、典拠を求められないものの、獅子に跨る例が、円珍請来の愛染明王像と呼ばれるものに確認できる[36]。本像の実物は伝わらないが、所伝では、日輪中に坐す愛染明王像の下に四面獅子が描かれるとされており、この獅子は口より如意宝珠を雨らすといわれている。『不動愛染感見記』の愛染明王の右隣に描かれる四肢の獣は、あるいはその獅子を表顕したものとも推測できる。

次に、不動明王の月の中に描かれる樹木については、桂（月桂・月桂樹）であることが推測される。古代中国では、月の中には桂の木が生えていると考えられていたようで、これを月桂あるいは月中桂とも呼んでいた[37]。月桂は、高さが五〇〇丈あり、切っても切ってもすぐに切り口が直るという伝説上の霊木で、月桂の名は月の異称としても用いられている。そして、この桂樹を伐らされている人物が、中国の神話に登場する呉剛[38]と呼ばれる人物で、これらの説示に基づくと、『不動愛染感見記』の月桂の樹下に坐す人物画は、帝釈天ではなく呉剛をさすものとも推察される。

最後に、愛染明王の図像中に描かれる水瓶についてであるが、これは愛染明王の日輪や蓮台を支える宝瓶で、しばしば愛染明王図像に描かれることが知られており、増益の本誓を象徴するものといわれている。この宝瓶は、坐下に在らずして前に置く図像もあるという[39]。

五、むすびにかえて

以上の考察を約言すると、次の通りになる。

（a）『不動愛染感見記』を紹介した資料の初見は、管見の限りではあるが、永禄三年（一五六〇）の広蔵院日辰撰『祖師伝』であると思われる。本書には、『不動愛染感見記』の図絵に関して、愛染明王が「日形」の中に、不動明王が「月形」の中に描かれている旨の記述がみえる。日蓮聖人の不動明王感見の記述には「月」という言葉は認められないのであるが、本書においてこれを「月形」と定めた根拠は示されていない。

（b）『不動愛染感見記』の文面および図像の全容を忠実に書写したと思われる最初の事例は、貞享四年（一六八七）に伊東阿闍梨日達によって版行された木版画である。これによると、『不動愛染感見記』が、版木の作成された一七世紀後半には、今日伝存する姿とほぼ同じ状態で存在していたこと、愛染明王の日輪については、上端が欠けていなかった可能性があること、同書が小泉久遠寺および保田妙本寺の両山に代々相承されてきたものであること、同書の図像について「日月形像」との認識がなされていたこと、などが読みとれるのである。

（c）『不動愛染感見記』において、不動明王が月輪の中に描かれるのは、それが「月」の化身とみなされていたためであり、愛染明王が日輪の中に描かれるのは、仏像・仏

画などにおいて愛染明王が光背に「日」を背負うモチーフにも共通する観念であると思われる。日蓮聖人の披見の事実は確認できないが、『四帖秘決』にはその理論的根拠が認められる。

（d）『不動愛染感見記』に表される動物画のうち、愛染明王の黒烏は、中国神話の「三足烏」、日本神話の「八咫烏」に相当するものと考えられ、いずれも日輪・太陽の化身であることが指摘できる。なお、同図に描かれる四つ足の獣については、獅子と思われるが、確証はない。

（e）『不動愛染感見記』に表される動物画のうち、不動明王の兎は、『大唐西域記』「兎王本生譚」にその典拠を辿ることができ、月輪・太陰の象徴として描かれていることが判る。日蓮聖人は、『松野殿女房御返事』に同類の故事を引いている。

（f）『不動愛染感見記』の不動明王の月輪中に表される植物画は、『酉陽雑俎』等の記述に拠れば月桂樹であることが推察される。

（g）『不動愛染感見記』の不動明王の月輪中に表される人物画は、『大唐西域記』の記述に拠れば、月の宮殿に住む帝釈天であり、『酉陽雑俎』等の記述に拠れば、月桂樹を伐る呉剛であると推測される。

（h）このように、『不動愛染感見記』においては、烏は太陽のモチーフとして、兎・月桂樹・呉剛は太陰のモチーフとして、それぞれ意図的に書き加えられたものと解釈できる。ただし、日蓮聖人が図中に描かれるこれらの構成と配置を何を参考にしたかは未詳である（40）。

以上、日蓮真蹟『不動愛染感見記』について、その図絵の意義と内容について考察を試みた。これらの考察により、日蓮聖人が本書の図中に描写した様々なモチーフは、いずれも根拠を有するものであることが理解できた。また、愛染明王自体も、烏等ともに太陽の象徴として図案化されたものであり、不動明王自体も、兎・月桂樹・呉剛等とともに太陰の象徴として図案化されているのである。すなわち、日蓮聖人の二明王感見という宗教体験は、こうした既存の神話上の世界観と矛盾がないことが指摘でき、それは取りも直さず、そうした世界観を根底にして本図の様々な構成要素が意図的に書き加えられていることを意味するのである。

註

（1）立正大学日蓮教学研究所編『昭和定本日蓮聖人遺文』一六頁（身延山久遠寺、二〇〇〇年）。日蓮聖人真蹟集成法蔵館編集部編『日蓮聖人真蹟集成』四巻三八～三九頁（法蔵館、一九七七年）。

（2）先行論文として、従野公徹稿「不動・愛染感見記の一考察」（『仏教学論集』四・五号、一九六八年）に『不動愛染感見記』の図像に関する研究がみえるが、これは本書の像容・構図等の解説にとどまるもので、図の意義や典拠についてまでは言及していない。

（3）真蹟遺文では、『不動愛染感見記』に先立ち、中山法華経寺蔵の『富木殿御返事』（『昭和定本日蓮聖人遺文』一五頁）が、建長五年（一二五三）一二月九日に系年されるが、本書には年号の記載がなく、系年についても建長六年（一二五四）説等があり定かではない。これについては、中尾堯稿「富木殿御返事と日蓮聖人伝の検討」（宮

崎英修先生古稀記念論文集刊行会編『日蓮教団の諸問題』所収、平楽寺書店、一九八三年）および「『某殿御返事』（折紙）の位置とその伝来―新発見の日蓮真蹟書状をめぐって―」（高木豊・冠賢一編『日蓮とその教団』所収、吉川弘文館、一九九九年）は、建長五年説を主張している。一方、親写本として知られる嘉禎四年（一二三八）書写の『授決円多羅義集唐決』および建長三年（一二五一）書写の『五輪九字明秘密義釈』（いずれも『昭和定本日蓮聖人遺文』二八七五頁）は、年月日は記されるが「日蓮」の署名がない。よって、確実に現存最古の日蓮真蹟遺文と断定できるのは、『不動愛染感見記』であるといっても過言ではない。

（4）日蓮聖人真蹟集成法蔵館編集部編『日蓮聖人真蹟集成』四巻三四五頁（前掲書）所載の実測値による。

（5）文化庁監修『重要文化財総目録―書籍・典籍・古文書編―』八頁（毎日新聞社、一九七七年）。

（6）『昭和定本日蓮聖人遺文』一六頁（前掲書）では「日蝕」と表記するが、真蹟では「日■」が正しい。『日蓮聖人真蹟集成』四巻三八頁（前掲書）参照。「日蝕」と「日■」では意味が異なるとする説もある。

（7）悉曇梵文を漢字音写する方法は一定ではないが、当該真言を仮に音写すれば、「吽悉地惹吽鑁斛」となるか。「吽」は息災、「悉地」は成就、「惹」は召請、「吽」は引入、「鑁」は縛住、「斛」は歓喜の意。「惹吽鑁斛」は四明の真言で、「生きとし生ける者を引入して喜ばしめる方よ」の義。「吽悉地」は愛染明王を顕わす真言でもあり、また「斛」は愛染明王の種字（hhum、hum）に相当する。中村瑞隆他著『梵字事典』（雄山閣、一九七七年）、種智院大学密教学会編『梵字大鑑』（名著普及会、一九八三年）参照。なお山中喜八編『御本尊集目録』一七一頁（立正安国会、一九八〇年）によれば「吽悉底弱吽鑁穀」。

（8）当該真言を仮に漢字音写すれば、「曩莫三曼多没駄喃憾」となるか。「曩莫三曼多没駄喃」の意味は、「あまねき諸仏に帰命したてまつる」の義。「憾」は不動種字（ham、kam）にあたる。これらの真言陀羅尼が、金剛部所属の尊格に付せられる定型句か、胎蔵部所属の尊格に付せられる定型句かを判別することで、日蓮聖人の真言相承の系譜がいずれであるかを判断することが可能となるかも知れない。中村瑞隆他著『梵字事典』（前掲書）、種智院大学密教学会編『梵字大鑑』（前掲書）参照。なお『御本尊集目録』一七二頁（前掲）によれば「曩莫三曼多没駄南憾」。

（9）『日蓮聖人伝記集』六一九～六二一頁（本山本満寺『日蓮宗全書』、一九七四年）。

（10）『日蓮聖人伝記集』六一八～六一九頁（本山本満寺『日蓮宗全書』、一九七四年）。

（11）日蓮教学研究所架蔵写真帳『平成五年度宗宝調査　静岡県東部管内寺院　二』所収。立正大学日蓮教学研究所の都守基一氏ならびに興風談所の菅原関道氏・坂井法曄氏の教示による。

（12）「三七世」は「三十七世」ではなく「三」と「七」の乗で、つまり二一世に相当する。同寺の歴代譜では、開山に日蓮聖人を仰ぐので、日達は二二世になる。日蓮宗寺院大鑑編集委員会編『日蓮宗寺院大鑑』一一四二頁（池上本門寺、一九八一年）。

（13）『日蓮聖人伝記集』二二六頁（本山本満寺『日蓮宗全書』、一九七四年）。

（14）『本化別頭仏祖統紀』九〇頁（本山本満寺『日蓮宗全書』、一九七三年）。

(15)『日蓮聖人伝記集』三五四～三五五頁（本山本満寺『日蓮宗全書』、一九七四年）。
(16)『不動愛染感見記』の図絵が日蓮聖人の直筆になるか否かについては、高木豊稿「〈二人の日蓮〉改稿―金沢文庫蔵「理性院血脈」を日蓮伝の史料から除くべき歟のこと―」（『大崎学報』一三五号）においても検討されている通りである。確かに、本図が日蓮聖人の筆になるものか否かについは議論が分かれるところであるが、少なくとも、日蓮の署名があるところから、たとえ本図を絵師等に描かせたとしも、そこに描き込まれた様々なモチーフは、日蓮聖人の宗教体験を描写したものに変わりはない。すなわち、日蓮聖人は、自分の宗教体験のイメージを忠実に絵師に描かせたはずであり、そこに描き込まれた図様は、まさに日蓮聖人の脳裏に焼き付いていたものなのである。もし本図絵が絵師の作であったとしても、完成した感見図の内容をその目で確認をした上で、日蓮聖人は「日蓮」の署名をしたためたに違いない。
(17)『吾妻鏡』巻四四「建長六年正月一日条」には、日蝕の記録はない。『新訂増補国史大系　吾妻鏡』四巻五七三頁（吉川弘文館、一九七三年）参照。
(18) 清澄寺は、現在、千葉県安房郡天津小湊町清澄山に所在する。奈良時代の宝亀二年（七七〇）、不思議法師の創立になると伝えられる。天台宗の慈覚大師円仁（七九四～八六四）を中興の祖とする。鎌倉時代には、もっぱら虚空蔵菩薩求聞持法を修行の中心とし、日蓮聖人が入山した当時は、諸宗兼学の風潮が強く、法華・台密（天台密教）・東密（真言密教）・念仏（浄土教）の教義が錯綜していたといわれる。その後、江戸時代初期には真言宗智山派に帰し、昭和二四年（一九四九）に日蓮宗に改宗した。
(19) 虚空蔵菩薩は、広大無辺の功徳を包蔵していることが虚空のようであるという意味から命名された菩薩。日本には、養老二年（七一八）に求聞持法（虚空蔵菩薩を念じて記憶力を得る修行法）の菩薩として唐より将来され、弘法大師空海（七七四～八三五）もこの修行法を受けて真言密教を開宗するに至ったといわれている。
(20) なお、日蓮聖人が、従来より指摘されているような理性院血脈の相承を受けたか否かについては、諸説があり定かではない。高木豊稿「〈二人の日蓮〉改稿―金沢文庫蔵「理性院血脈」を日蓮伝の史料から除くべき歟のこと―」（前掲書）参照。
(21)『昭和定本日蓮聖人遺文』一〇三～一〇九、一一六～一一八、一二六頁（前掲書）など。
(22) 日吽の「吽」は、厳密には梵字表記である。金沢文庫所現蔵の『金剛界鑁口伝』の奥書に「建長五年癸丑九月廿日午時書了　於打墨筆師肥前公」とみえ、また同文庫蔵の『五輪九字明秘密釈』の奥書に「建長六年甲寅九月三日未時了　清澄山住人　肥前公日■生年廿七歳」とみえる。関靖稿「原本の装釘并に由来に就いて」（『授決円多羅義集唐決景本解説』金沢文庫同好会、一九三六年）。
(23)『覚禅鈔』巻三「不動明王法」（『大日本仏教全書』五五巻七五～一一四頁、一九七一年）。『望月仏教大辞典』（世界聖典刊行会、一九五四年）「不動明王」の項参照。『不動愛染感見記』において、不動明王が月の中に描かれるのは、実はそれが月の化身であると考えられていたこととも関連があるか。不動明王の縁日が二八日に定められているのも、月の盈虧（満欠）の周期が二八日であることに起因するといわれる。ちなみに、日蓮聖人立教開宗の四月二八日も、清澄寺では四月の不動縁日であったと推測され、縁日には信徒が多く参詣するので、その場を借りて聖人の諸宗遊学の成果発表

日にあてられたのかも知れない。

(24)『覚禅鈔』巻三「愛染王法」(『大日本仏教全書』五五巻一一五〜一四一頁)。『望月仏教大辞典』(世界聖典刊行会、一九五四年)「愛染明王」の項参照。愛染明王の像が「日」を背負うという構図は、『不動愛染感見記』にも明らかである。『不動愛染感見記』で愛染明王が日輪の中に描かれる理由は、ここにあるか。

(25)『続天台宗全書』「密教三」四〇三頁(天台宗典編纂所、一九九〇年)。尚、本文には続いて、「世俗日烏月兎申」との記述がみえ、後述する『不動愛染感見記』の図様と共通する観念が確認できる。興風談所の菅原関道氏・坂井法曄氏の教示による(成田教道氏の発表資料「八舌の鑰の口伝をめぐって」より)。なお、水上文義稿「伝・良助親王撰『与願金剛地蔵菩薩秘記』小考—もうひとつの『蓮華三昧経』—」(菅原信海編『神道習合思想の展開』汲古書院、一九九六年一月、三九一頁)には、密教における愛染・不動の組み合わせについての検討がみえ、『四帖秘決』『瑜祈経聴聞抄』(『続天台宗全書』「密教二」三〇六頁)等を引いて、これらは立川流の影響を受けた可能性があることを指摘している。ただし、これをもって日蓮聖人の感見の体験が立川流の修法に則ったものであったか否かは、短絡的には断言できない。

(26)『新釈漢文大系』五四巻三二三頁(明治書院、一九七九年)。

(27)『新釈漢文大系』六九巻七六三頁(明治書院、一九七九年)。

(28) 袁珂著・鈴木博訳『中国神話伝説大事典』(大修館書店、一九九九年)「三足烏」の項参照。なお、同書には、漢代の画像石刻「日中三足烏」の図が収められている。

(29)『新訂増補国史大系　日本書紀』前篇一一五〜一一七頁(吉川弘文館、一九五一年)。

(30) バーラナシー(Varanasi)国。古代印度十六大国の一つで、マガダ国の西、コーサラ国の北に位置する。

(31)『大正新修大蔵経』五一巻九〇七頁b。

(32)『新釈漢文大系』三四巻一一一頁(明治書院、一九七〇年)。

(33)『新釈漢文大系』六九巻七六三頁(前掲書)。

(34) なお、『淮南子』巻六「覧冥訓」(『新釈漢文大系』五四巻三一九頁、前掲書)、同巻七「精神訓」(『新釈漢文大系』五四巻三二三頁、前掲書)にも、月中に兎や蟾蜍がいることを指摘する。『中国神話伝説大事典』(前掲書)「月精」の項参照。

(35)『昭和定本日蓮聖人遺文』一六五一〜一六五二頁(前掲書)。これについては、かつて「譬喩にみる日蓮聖人の動物観(二)—輪廻転生と竜女成仏をめぐって—」(『日蓮教学研究所紀要』二四号、一九九七年三月)において触れた。

(36)『覚禅鈔』巻三「愛染王法」(『大日本仏教全書』五五巻一三三頁)。立正大学日蓮教学研究所副所長の小松邦彰氏の教示による。

(37) 唐の段成式(生歿年未詳)によって九世紀半に撰述された『酉陽雑俎』巻一「天咫」(今村与志雄訳『酉陽雑俎』一巻四六頁、平凡社『東洋文庫』三八二、一九八〇年)にみえる。また、『太平御覧』九五七巻には『淮南子』の文を引いて、同四巻には『安天論』の文を引いて月桂を紹介するが、いずれも原典にはみられない。楠山春樹著『淮南子』上の「口絵写真」(『新釈漢文大系』五四巻、前掲書)には、蟾蜍・桂樹・天女の嫦娥とともに仙薬を擣く兎を顕わした「月桂鑑」が紹介されている。古来より中国では、蟾蜍・桂樹・白兎・嫦娥は、ともに月精としてとらえられていたことがわか

る。また、漢代の石刻画像や甎画では、蟾蜍・白兎は、三足烏・九尾狐とともに、西王母の傍らに侍る吉祥の精霊として描かれることで知られる。これらについては、『中国神話伝説大事典』（前掲書）「月桂」「月精」「■娥」「嫦娥」「九尾狐」の項を参照のこと。なお、「月桂鑑」の「鑑」とは「鏡」の意でもあるが、月が鏡であることについては、かつて、「日蓮聖人遺文における「水月」の譬喩について」（『立正大学大学院年報』一三号、一九九六年三月）において考察した。

(38)『酉陽雑俎』巻一「天咫」（『酉陽雑俎』一巻四六頁、前掲書）。呉剛は、神話上では後漢の人で、姓を呉、名を剛といい、仙術を学んだが、過失のために流謫され、罰として、伐ってもきりがない月桂樹を斫らされていると伝えられる。『中国神話伝説大事典』（前掲書）「呉剛」の項参照。

(39)『覚禅鈔』巻三「愛染王法」（『大日本仏教全書』五五巻一二七～一三〇頁）。密教辞典編纂会編『密教大辞典』「愛染明王」（法蔵館、一九六八年改訂増補版）の項参照。

(40) なお、京都府宇治市の三室戸寺（修験宗別格本山）所蔵の「摩尼宝珠曼荼羅」一幅には、日蓮聖人の『不動愛染感見記』と酷似した図様の不動明王図と愛染明王図が確認される。奈良国立博物館編『特別展　仏舎利と宝珠―釈迦を慕う心』（奈良国立博物館、二〇〇一年七月、二一二頁）によれば、当曼荼羅は、摩尼宝珠を中心にさまざまな尊像を描き込んだ異色の曼荼羅といわれ、伝未詳ではあるが、一五世紀室町時代頃の作と推定されている。絹本着色で、寸法は、縦八九・三cm×横三七・一と報告される。時代的には、『不動愛染感見記』より二世紀ほど下るわけであるが、ほぼ同様の図式を有している点は興味深い。摩尼宝珠曼荼羅の作者が『不動愛染感見記』を披見・模写したのか、『不動愛染感見記』「摩尼宝珠曼荼羅」に描かれるような図様の元となった、共通の相伝の類があったのかは未詳である。往見されたし。日蓮教学研究所研究員ルチア・ドーラ・マリア・ドルチェ女史の指摘による。私見では、先述のとおり、『不動愛染感見記』には後世に版行された事例もあるので、本曼荼羅はそうした版本の類を披見した人物によって図顕されたとも考えられる。とすれば、本曼荼羅は一七世紀の作か。